

宮下眞二 小論 — ある英語学研究者の軌跡

小 川 明

(平成元年9月27日受理)

A Study of English Language Linguist Shinji Miyashita

Akira OGAWA

(Received September 27, 1989)

序

I

英語学の研究者である宮下眞二は、その名を知って以来、絶えず私の内部に刺のように突きささって、気にかかる存在であった。どうしてそうなのか。この疑問を解くことは、一介の英語学の研究者である私にとって、これからどのように研究の進路を切り開いていくかという切実な問題に対する解答の手掛りを与えてくれるように思われる。それゆえこの小論において、やや私自身の個人的な経験に照らしあわせて、宮下眞二という英語学研究者のことを考えてみたいと思う。

初めて宮下の存在を知ったのは、いつであったろうか。三浦つとむの著作のなかで、多分『認識と言語の理論・第三部』（勁草書房）において「構造言語学の変形としての変形文法」（『試行』31号 1970年10月）に言及されていることに気づいた時であろうと思う。何となくその題に興味を持ったのだが、『試行』という雑誌の存在も知らなかったし、バックナンバーはなおのこと手に入りそうもなかったで、そのまま捨てておいた。たまたま勤務先が変わって、ある会の時となりあった、ドイツ語を教えていて詩人でもある同僚に何気なくその雑誌について話したら、よく知っていて、バックナンバーを持ててくれたのが、彼の論文を読んだ最初だったのである。

最初の印象は、それほど感銘を受けた訳でもなく、希薄である。何故こんなことを書くのかその根拠がよくわからなかった。

彼の経歴は普通の英語学研究者と異っている。彼は東北大学文学部の日本思想史学科に学部時代は籍をおいている。卒業論文は北村透谷についてであった。1971年にそこを卒業して大学院は文学研究科英語学専攻に進学する。そして1973年に修士課程を修了し、北見工業大学に就職して、一般英語を担当した。

ここでなぜ学生時代に進路が変わったのかという疑問が湧く。彼の第一番目の著書『英語はどう研究されてきたか』のはしがきの冒頭で「この論文集には、私が1969年に英語の謎を解くことを志してから今日まで書いた英語学および言語学の論文の大半を収録してあります」と書いてある中に、1969年という数字が見えていることから判断すると、すでに文学部三年生の時に英語学に関心を持ちはじめたことがわかる。これには何か決定的な理由があるのだろうか。多分、三浦つとむの著作が関与しているのではないかとと思われる。これを裏付けるものとして、彼の遺稿集『英語はどういう言語か』に含まれる橋浦弘喜の追悼文を挙げることができる。「学部に進んで、日本思想史を専攻した彼が、私の専攻していた言語学の分野に関心を抱き始めたのは卒業も間近のところだった。そのころ、彼の口から吉本隆明氏や三浦つとむ氏の名前が頻繁に聞かれるようになり、彼の進むべき学問の分野も次第に固まりつつあったのではないかと思う」と橋浦は書いている。

東北大学の英語学科はたくさんのすぐれた変形文法研究者を生み出してきた。その中で彼は異質の存在である。徹底的に変形文法に対して批判的であるのである。彼は『英語はどう研究されてきたのか』のはしがきで「内容

は、副題「現代言語学の批判から英語学史の再検討へ」に端的に示してあるように、チョムスキーの変形文法を中心とする現代の欧米の言語学に根本的な疑問を抱き、それを批判して、更にその歴史的背景を成す英語学史の再検討を試みたものであります」と書いている。さらに彼の『英語文法批判』のはしがきの中の「お察しの通り、私は現在支配的な構造言語学や変形文法に疑問を懐いて、英語学に志した者です」という記述と、学部の時すでに英語学に関心を持ったことから判断すると、すでに大学院に入る前に確固たる自分の言語観を持ってしまっていたことがわかる。大学院では孤立していたのではなかろうか。

そしてたくさんの論文を残して、北見工業大学に在職中、1982年4月4日未明、熱海で35才の若さで自殺をしてしまうのである。まず遺稿集『英語はどういう言語か』の著書論文等目録を参考にして英語学・言語学関係の著作をリストにしてみよう。

著 書

英語はどう研究されてきたか

— 現代言語学の批判から英語学史の再検討へ

1980年 季節社

現代言語学批判（共著）

— 言語過程説の展開 1981年 勁草書房

英語文法批判

— 言語過程説による新英文法体系 1982年

日本翻訳家養成センター

英語はどういう言語か（遺稿集）1985年 季節社

修士論文

The Speculations on the English Language from the Sixteenth Century to the Eighteenth Century.

研究論文

構造言語学の変形としての変形文法

— チョムスキー『言語と精神』の批判

1970年 試行 31号

能動態が先か受動態が先か

— 変形妄想の一つ 1971年 試行 33号

英語はどう研究されてきたか（1）～（9） 1972～

1976年 試行 36～43, 46号

哲学者の命題論 1977年 試行 48号

イエスベルセンの文法論（1）～（5） 1978～1979年

試行 49～53号

冠詞論 1980年 試行 54号

英語は孤立語的・膠着語的・屈折語である

1981年1月 翻訳の世界

冠詞は何を表すか 1981年5月 翻訳の世界

変形文法の展開とホーキンズの冠詞論 1981年

『現代言語学批判』所収

サアルの認識論

— 認識の検討を避けて認識と言語の謎が解けるか 1981年

『現代言語学批判』所収

哲学者の固有名詞論 1981年 『日本の英語学』

開拓社 所収

学生はどこで落ちこぼされたか 1982年1月

翻訳の世界

II

大方の英語学の研究者は、普通このような道を辿らない。私の狭い経験によれば、学部で英米文学か英語学のうちから自分の適性に合わせて英語学を選びとり、卒論を書き、大学院に進むことになる。私自身は構造言語学の退潮期から変形文法の台頭期にかけて、学生生活を送ったが、どちらの理論についても、基本的には同様の習得の仕方をした。入門書および基本的文献を読み、講義を受け基本的な事項を学び、その理論の中で生じる問題について自分で解決をして行くというプロセスを辿った。もちろん構造言語学や変形文法以外の言語理論も多少は学ぶが、大抵はその時期において主流的な理論を主として学ぶことになる。

このことについて言えば、うろおぼえで、事実なのかどうか確かめようがないのであるが、ハーバード大学対MITの教育の型があるそうである。もっともこれが事実かどうかはこの問題には関係ない。典型的な二つのタイプの教育の仕方があることが重要である。ハーバード大学型では複数の言語理論を学ばせるのに対して、MIT型では最初からひとつの言語理論を学ばせる。すぐ思いつく長所は、ハーバード大学型では理論を選択しなければならないので、異った理論どおしの間の批判的検討がなされることになる。一方MIT型では、きわめて早く研究が進んでいる現実から見ると、短期間に能率的に研究の先端に到達し、新しい研究成果を生み出すことができる点が有利である。どちらかという、日本ではMIT型の教育を受けた人の方が多いのではないと思われる。その時に生じる短所は、無自覚のうちに、大抵の場合は

その時に主流である理論を習得してしまうことである。これはある意味では危険なことであって、このような無自覚性に対する強い批判が存在する。

他のなにものを疑っても自らの踏まえる方法的立場の「科学」性（実は単なる直接性）だけはこれ信じて疑わず、守銭奴のように握りしめた自らの方法意識だけはこれを決して手離すことのなかった、… — 矢野武貞『「吃音」の本質』（弓立社、1979年）p. 67.

学問において如何なる本質論を採用するかといふことは、一つの賭である。ここに学者のアタマの真価が如実に現れるからであり、「人間は己が論理能力の範囲内でしか対象を理解出来ない」といふ一大真理が貫き通るからである。この賭は学者にとって恐いことである。ここで怯む者は、充分検討もしないで当世流行の学説に身を寄せ、安心立命を得ようとするものだが、かかる主体性のない態度は学問の本道を行くものではない。 — 鈴木學「書評『英語文法批判』」（『英語はどういう言語か』所収）p. 174.

私自身もこの無自覚性に対する反省を他の処で書いた。

ひとつの理論を自分の理論として選択する場合に自分の全存在をかけた選択をしたのだろうか。たまたま学生時代に盛んであった理論を教室で使用されるテキストがそうであるために何の自覚もなしに無批判に受け入れてしまったのではなかろうか。その時に異なる理論が盛んであればそれを選択したのではなかろうか。…実際ひとつの理論を自分の理論として受け入れるためには血の出る様な検討をしなければならないであろう。その上でそれを選ぶか拒否するかの手順をふまなければならないのではないか。たとえ選んだとしてもそのまま受け入れるのではなく批判的に摂取することになるであろう。そうしないと絶えずよその、特に外国の動向に追隨してうわべだけの模倣をしてしまうだけになるのではないか。 — 「英語学を志して」（『鬼隠』2号、1982年所収）p. 238.

III

それでは、そのような無自覚性をつきくずすものとして批判というものが存在するのであるが、少々批判ということについて考えてみたい。

批判には、いくつかの種類とレベルがある。思いつままに挙げてみよう。

まず(1)ある理論による実際の分析に対して、同一理論に基づく異なる分析をよりすぐれた代案として提案すること。たとえば変形文法理論の中で(i) I gave Mary a book. (ii) I gave a book to Mary. の関係を説明しようとする時、二つの分析方法がある。(i)を基底形、(ii)を派生形とする立場と、逆に(ii)を基底形、(i)を派生形とする立場がある。

(2)言語事実の分析によって理論そのものの改変をせまるもの。これには理論の根底を揺るがすものから表面的なものまでさまざまな段階があるであろう。この範疇に入るものとして生成意味論を挙げることができる。また「動的文法理論」もここに含めることができるであろう。ただ改変をせまる理論が前提になっていて、それに乗っかっている点が後述する(4)とは異っている。

(3)ある理論では、対象としている言語事実がうまく説明できないことを示すが、この言語事実の説明はその理論の対象外で、別の理論によってうまく説明可能であるとする共存型。たとえば久野の「機能文法」と変形文法、フィルモアの「格文法」と変形文法の間の関係。

最後に(4)、ある理論の根底そのものを疑って、その理論は駄目であるとするもの。これには二種類ある。第一に批判者は独自の理論を確立しているのではないが、徹底的に相手の理論の批判をするもの。この中に田中克彦『チョムスキー』（岩波書店）や I. Robinson, *The New Grammarian's Funeral – A Critique of Noam Chomsky's Linguistics* (Cambridge University Press, 1975)を含めることができるであろう。第二は批判者自体が確固たる自分の理論を持っていて、それに基づき相手の理論を否定しようとするもの。この持っている理論には批判の対象となっている理論とまったく異っているものからそうでないものまで程度の差があるであろう。このまったく異っているものの中に三浦つとむや宮下眞二を位置づけることができる。変形文法が構造言語学に対抗して誕生した時、変形文法の研究者達はこの(4)の意識を持ったことであろう。（も

っとも三浦、宮下から見るとこの二つの理論は同一のグループに属することになる)

ざっと思いつくまま挙げてみたのであるが、(1)から(3)までの種類の批判は、変形文法の研究者には馴染みのものであって、目の前でしょっちゅう行なわれていることである。絶えまない相互批判が変形文法を進展させてきた。Chomsky自身も絶えず自分の理論の中に敵対する理論のすぐれているところを取り入れて来た。ところが(4)の種類の批判にはめったに出くわさない。宮下が私の内部に刺のように突きささって何か違和感を与える一番の原因は、彼の批判が(4)に属していることだと思う。ひとつの理論が身について日常的、自然のものになってしまうと、(4)の種類の批判は他の世界の出来事になってしまうと、まったく自分には関係がなくなってしまう感じがするのがあたりまえなのだが。

IV

さて宮下に戻ろう。私にとって彼の言語過程説に基づく理論はわかりにくい。何故か。私自身は構造言語学および変形文法を背景として自分の言語観らしきものを形成してきた。このような環境で育ってきたものにとって、最初、彼の理論は、文字通り異質のものであって、まったく比較を絶するものであった。

彼の考えが多くのわが国の英語学研究者にとって理解しにくいことをあらわすひとつのエピソードがある。政治学者・滝村隆一は、宮下の遺稿集『英語はどういう言語か』の中に追悼文「宮下眞二君の憶い出」(pp. 196～198)を書いているが、その中に次の記述が見られる。

彼と最後に会ったのは、私が眼痛をこらえながら『唯物史観と国家理論』の仕上げにかかっていた、79年の夏のことである。彼は私が引越して間もない与野に立ち寄り、駅前の喫茶店で、“学会で発表したのだが、三浦理論が全く知られていないため、質問が一つも出なかった”といい、1時間足らず話した別れ際に、“北海道は寒くてもうくたびれました。近く東京へ出てきます”といい残して帰っていった。

そして滝村は追悼文の最後を以下のように結んでいる。

彼はきっと、余人からは窺い難い程に孤独だったのだろう。この小文を書きながら浮びあがってきた宮

下眞二君の像は、わが国アカデミーとの孤絶した意義ある戦に敗れた、〈戦士者〉というに最も近い。果してこれは、たんに私一個の独断的推察にすぎないのであらうか？

しかしながら、苦勞しつつ著作を読んで行くと、多少とも理解ができるようになった。はじめて新しい理論を学ぶ時は、最初はむずかしいのであるが、加速度的に理解が進むようになって、すらすらわかるようになる。このことは私自身変形文法の学びたてや、全く新しい分野の本を読む時に、実感した。はじめてChomskyを読んだ時、今まで身につけた構造言語学の知識では、なぜこんな風に考えるのか理解に苦しんだ。しかし理解が進むと、その流れに自然に乗ってぐんぐん進めるようになる。このことが普遍的であることは次の二者の言葉を挙げれば充分であらう。

数学の世界では、学びの段階がある程度まで進んでくると、他の数学者のいかなる大理論であらうと、三カ月もあればマスターできるのが常である。

— 広中平祐『学問の発見』(佼成出版社, 1982年) p. 88.

くすでに認識に包括されてしまった対象は、必ず認識にとつて自然に転化する——吉本隆明「思考の話」(『詩的乾坤』国文社 1974年 所収) p. 413.

その異質さ、わかりにくさにもかかわらず、私は宮下に徐々に引きつけられた。何故なのか。ひとつは、その徹底した批判力に感心した。また現在圧倒的に優勢な変形文法に対するまったくの孤軍奮闘ぶりに感心した。しかしこのことは研究上本質的なことではない。彼の理論そのものが誤りであれば、それらのことは単に研究の姿勢上のモラルとして他山の石とすればそれで済むのであるから(と言っても私にとってこの批判力と奮闘ぶりはとても有益であった)。一番重要なことは、彼が奮闘し確立させようとしている理論そのものなのである。私はその中にある真理を感じた。私は今もって彼の理論に全面的に納得させられるものではないが、ある真実を感じる。それに引きつけられたのだと思う。それは、私が自分のよりどころとしてきた生成変形文法に対して少々の

不安、疑問をもちはじめたことに呼応している。はたしてこの理論の根本的な考え方は正しいのであるかという疑問が絶えず頭の中に浮び、もう一度根底的に検討してみたいと思うのである。その梃子として使えないかと思うのである。

V

宮下はどのように自分の言語観を形成してきたのであろうか。彼に決定的な影響を与えたのは、すでにのべたことであるが、三浦つとむであろう。そして三浦を通して間接的に時枝誠記、山田孝雄であろう。宮下は『英語文法批判』のはしがきで「私は時枝誠記・三浦つとむの言語過程説を武器として英語の謎と取組んでゐます」と書いている。三浦つとむに影響を受けて英語学研究におもむいたのではないか。三浦の著書ばかりでなく、直接の接触があることは遺稿集『英語はどういう言語か』の中の中三浦つとむ及び夫人、周囲の人々の思い出の中から明らかである。彼の論文のほとんどは、前述した論文リストから明らかのように、吉本隆明の主宰する直接購読雑誌『試行』に発表された。三浦もまたその雑誌に発表し、吉本は三浦の著書『日本語はどういう言語か』（講談社学術文庫）に解説を書いている。この二者の間は緊密であって、宮下は吉本・三浦という圏内に入っているとやってよい。この人達に共通していることは、現在流通している理論をそのまま安直に受け入れることをしないで、対象に直接ぶつかり自分の理論を創り出そうとしていることである。もっとも白紙の状態から理論をまったく新しく創り出すことは不可能であるから、何らかの先人の業績をふまえてそれを批判的に検討して発展させていくことになる。しかし決して先人の理論をうのみにすることはなく、徹底的な批判力が存在する。ひとことで言えば、既成の理論に対する根底的な批判力と、対象にぶつかり「通説をうのみにせず」新しい理論を創り出す力を尊重するということである。

印象の域を出ないが、この圏内にいる人達の基本的ストラテジーは、まず現在余り疑われず通用している既成概念に対して、自分の眼で対象を考察しつつ、徹底的に批判を加えることによって、自分の理論を創り出していくことのように見受けられる。

宮下と三浦は、細江逸記の研究をわが国の英語学研究のうちで創造的なものとして高く買うのであるが、細江はその著書『動詞叙法の研究』の一番最初を江戸時代の

土佐の日本古典研究家・鹿持雅澄の言葉で飾っている。

すべて世にすぐれた
人の言ひたる事に
委ねて強いて心を用
ひずして考え正さず
おきてはつひにその
ひがめるすじも直ら
ずしてやみぬべきを
いとほしみおもひて
やむことなく言える
なり

上の言葉の中に宮下たちと同じ考え方が見られはしまいか。

三浦つとむはその理論の土台を国語学者の時枝誠記の言語過程説に負っている。それを批判的に継承した。さらに溯ると時枝誠記は彼の言語過程説を鈴木胤などの古い国語研究に負っている。三浦はアカデミズムにまったく縁のない在野の研究者であって、彼の経歴はその著書『生きる学ぶ』（季節社 1982 年）によれば「1911年東京に生れる。本名は三浦二郎。少年時代は算数の応用問題や探偵小説に熱中し、名探偵になることを夢みた。実業学校（東京府立工芸）を中途退学。その後は働きながら独学で、映画論・言語論・哲学などの研究を進めた。以後現在にいたるまで在野の理論家として、認識論・言語論・芸術論・組織論・人生論など社会科学や哲学の幅広い分野において活発な研究著作活動をつづけている」であって、言語学は彼の幅広い分野のひとつにすぎない。膨大な著作があるが、言語学に関する著作を挙げてみる。

認識と言語の理論・第一部 1967年 勁草書房
認識と言語の理論・第二部 1967年 勁草書房
認識と言語の理論・第三部 1972年 勁草書房
日本語の文法 1975年 勁草書房
日本語はどういう言語か 1976年 講談社
こころとことば 1977年 季節社
言語学と記号学 1977年 勁草書房

三浦の周囲には、彼の理論によって言語研究をするグループができていく。これは三浦つとむ編『現代言語学批判』（勁草書房 1981 年）から窺い知ることができる。その目次を紹介してみよう。

なぜ送仮名を破壊するのか

上田博和

中国人は、語をどのように分類してきたか 内田慶市
変形文法の展開とホーキングズの冠詞論 宮下眞二
サールの言語論 宮下眞二
フランス語時称体系試論 鈴木 覚
スペイン語の ser と estar 鈴木 覚
精神医学と言語学 黒川新二

対象言語は、日本語、中国語、英語、フランス語、スペイン語であり、失語症、言語習得にも亘っている。そして三浦は、編集者あとがきに「学問の仕事をする者にとってもっとも嬉しいことは、「何とか賞」や「何とか章」をもらうことではなくて、自分の理論を正しく理解して役立ててくれる者が出てくることです。それゆえこの論文集の諸氏が私の理論を役立てて下さったことを嬉しく思い有難いと思っております」と書いている。

もっともこのグループの人達が宮下と同様孤立していることは、鈴木覚の言葉が示している。

宮下さんを知る以前は、講壇言語学界で黙殺されてゐる三浦言語学を何とか仏語学で生かしたいものと、独りで研究を続けてゐたものですが、宮下さんを知り、宮下さんの仲介で同学の方々とお知合ひになることが出来て、大いに勇気づけられたものです。

— 鈴木覚「宮下眞二氏の遺したもの」（『英語は
どういう言語か』所収）p.188.

このような世界の中に宮下はいたのである。

結 語

以上、宮下眞二という英語学者について、その生涯、どのように自分の理論を形成してきたのか、その周囲の彼に影響を与えてきた人達について、いわば外的な事情について述べてきた。彼の理論そのものはこれから生涯かけて検討をしていかなければならない。いずれ稿を改めて論じてみたいと思う。